

緒明山

通信16

©AKIYAMA-TSUSHIN

「横須賀海兵団」(修業記念アルバムより、郷土資料室蔵)

発行日
令和7年(2025年)4月18日発行者
横須賀市立中央図書館郷土資料室
住所 神奈川県横須賀市上町 1-61
電話 046-822-2077本誌は印刷発行していません。
右の二次元コードか下の URL
で横須賀市立図書館ホーム
ページ内「デジタルアーカイブ」
にアクセスして閲覧してください。
ダウンロードもできます。<https://www.yokosuka-lib.jp/contents/archive/>

《 手記 》

海軍生活の思い出

海軍上等衛生兵曹「黒川亮二」の戦争

元海軍上等衛生兵曹 黒川亮二

— 横須賀海軍病院・潜水艦基地隊、鈴鹿海軍航空隊、
上海特別陸戦隊(浦東・洞庭湖)、千島列島占守島 —

横須賀海兵団に始まり海軍病院など横須賀での軍歴を有する黒川亮二氏の「海軍生活の思い出」を紹介する。

黒川氏は大正7年(1918年)8月3日に静岡県磐田郡光明村(現、浜松市天竜区)に生まれた。昭和13年(1938年)4月の徴兵検査で甲種合格の後、昭和14年1月10日に横須賀海兵団に入団し、海軍四等看護兵を命じられた。その後一貫して看護兵・衛生兵として従軍し、上海では開戦に遭遇した他、千島列島最北端の占守島では極寒の生活に耐え、その後、無事に帰還して終戦を迎えられた。

本稿は、黒川亮二氏の口述を妻のよし子氏が丹念に筆記した原稿を基に、手記としてまとめたものである*1。

主な履歴(厚生労働省「履歴原表」より抜粋)

年月日	所轄	記事
S14. 1.10	横須賀海兵団	海軍四等看護兵ヲ命ス
S14. 5.15	横須賀海軍病院	海軍三等看護兵ヲ命ス
S14. 6.15		結核病舎勤務ヲ命ス
S14.11. 6	鈴鹿海軍航空隊	
S15. 5. 1		海軍二等看護兵ヲ命ス
S16. 5. 6	上海海軍特別陸戦隊	5.8 佐世保発
S16.10. 1		海軍一等看護兵ヲ命ス
S17. 2. 1		普通善行章一線付与
S17.11. 1		海軍衛生兵長トナル
S17.11.20	横須賀潜水艦基地隊	11.24 佐世保着
S18. 5. 1		任海軍二等衛生兵曹
S18.9.15	館山海軍砲術学校	
S18. 9.20	第四十二防空隊(占守島)	
S18.11.10	第五十一警備隊(占守島)	
S19. 5. 1		任海軍一等衛生兵曹
S20. 5. 1		任海軍上等衛生兵曹
S20. 7.10	大湊警部府	8.1 大湊着
S20. 9. 1		予備役編入

1 俺は海軍! 徴兵検査と出征の記憶

私が徴兵検査を受けたのは昭和13年の4月です。検査は当時の静岡県立二俣女学校の講堂で行われました。その時の検査官は豊橋歩兵十八聯隊長の足立重蔵陸軍大佐でした。今の若い人には分からないでしょうが、徴兵検査は大変誇り高いことでした。その当時、私たちは教育勅語中心の軍国主義の教育を受けていましたので、日本国家の徴兵検査は当然のことだったと思い出しています。

昭和13年10月1日付けで「横須賀海兵団二入団ヲ命ス」との書面が到着して、「俺は海軍だなあ」としっかりと自覚できました。当時、中国大陆では陸軍が事変を起こしていて、日本国内も大変な時でした。昭和12年以来の戦争状態が続き、軍歌が大きく歌われ世の中は戦時色一色でした。

昭和13年度、私の生まれた光明村で徴兵検査を受けた若人は全部で65人でした。その内、甲種合格者*2は20人で、50年前のことですが良く記憶しています。その中の私1人だけが海軍だったので、当時の徴兵検査の内容を知りたいのですが一向に分かりません。検査を行う人は陸軍軍医大尉、中尉、曹長、上等兵若干名でした。戦後分かったことですが、昭和11年、12年度も光明村で海軍はただ1人でした。甲種合格20人の大半は豊橋歩兵十八聯隊で、中には名古屋の野砲兵三聯隊もありました。

昭和13年の検査で合格したものは14年1月に入隊と大体決まっていた。この頃、国際的には日独伊防共協定が中央政府で盛んに論議されていた。これも戦後分かったことですが、海軍部内に

日独伊防共協定反対論があり、そのために陸軍がいくらふんばっても協定が遅れ遅れになっていたそうです。当時の海軍内部は、海軍大臣米内光政大将、次官山本五十六中将、井上成美少将が中心でした。陸軍に押されて日独伊防共協定が成立しました。

戦時色がますます高まる中、昭和13年も終わり昭和14年新春を迎えました。私は浜松に奉公に出ていましたが、1月3日に実家に帰ってきました。

1月5日に故郷光明村の百古里で区民全員の壮行会があり感銘しました。当時、山東小学校の傍らにあった光明村役場でも壮行会を開いていただき、村長の言葉、来賓の言葉、内容は忘れましたが戦時色豊かな言葉でした。

1月8日、実家に隣組一同が集まり、私のために入団の祝を行ってくれ、武運長久の神様で知られる光明山にも皆でお参りをしてくれました。夜は入団祝賀の宴会が開かれました。私には貞吉という兄がおり、昭和12年1月10日に名古屋の輻重兵*3第三聯隊に入営していました。その兄も参加し、その時の深い感銘を今でも忘れることはできません。入団を祝す幟旗が10本くらいあったと思います。当時の入営、入団者の家は、出征兵士の家として隣組の人々から大変な敬意を表されていました。

1月9日の出発ですが、その日は縁起が悪いということで、私の母の姉の家に一泊することにして、家を1月8日に出ました。こんな些細なことまで心を気遣ってくれた母の愛情の深さを、今なお忘れることができません。無学な母でしたが、人間として素晴らしい女性であったことは確かです。

家を出る時に万歳三唱して隣保の人全員で、光明村と二俣町の接点、今はありませんが池の端まで長い幟旗を持って送ってくれました。兄の貞吉輻重上等兵は、陸軍では特別の兵科として軍刀と長靴が許されており、その将校と同じくらい立派な軍服姿に敬服し、ただ感激した思い出があります。その軍刀は兄の出征の際に祖父の九朗が贈ったもので、現在は我が家の家宝として大切にしています。

2 夢にまで見た横須賀へ

故郷と別れて、浜松駅から東海道線の上り列車に乗り込み横須賀へ向いました。横須賀海兵団には1月10日朝7時入団の予定です。途中、江ノ島の岩本楼旅館に一泊しました。1月9日です。その日の

夜、海軍主計科の下士官が来て、入団前の私たちに海軍について説明してくれたことを覚えています。

私の付添いは父親でした。深夜2時に起きて朝食を済ませてから江ノ電に乗り鎌倉駅まで行き、そこから横須賀線に乗り換えて軍港に到着しました。今は懐かしい母港ですが、当時は初めてで夢にまで見た横須賀です。その第一歩を踏み出し、私の海軍生活、約6年8か月の始まりです。

横須賀駅から横須賀海兵団までは徒歩で約30分ですが、7時ちょっと前に入団できました。入団して団内へ入ると入団者は右、付添いは左へと分かれます。入団者は海軍の兵隊の先導で各分隊へ行きました。横須賀海兵団第六十六分隊です。すぐさま身体検査が始まり午前中かかりました。襦一本の姿ですが、緊張のためか心意気のことか寒いとは思いませんでした。身体検査も無事終了して私たちは新兵級です。第三兵舎第六十六分隊に集められ、同年兵の初顔合わせです。総員96人でした。

海軍では新兵教育は新兵だけで行い、古い兵隊と一緒にではありません。教班長という下士官が各教班に1人ついて教育します。第一教班長が海軍一等看護兵曹滝田金恵で、第二教班長は海軍一等看護兵曹山口滝、以下、海軍一等看護兵曹合田祝、海軍一等看護兵曹松崎傳三、海軍二等看護兵曹副島七郎、海軍二等看護兵曹佐藤義雄、海軍二等看護兵曹杉山裕、計7人の教班長でした。入隊直後、一週間くらいはお客様扱いでした。一週間後、入団式が行われ、私たち新兵は、海軍四等看護兵を命じられました。時の団長は藤田類太郎海軍大佐です。

入団式も終わり、その日の昼食は赤飯でした。お祝いの食事です。明けて翌日、手の平を返したように各教班長の態度が陰悪となり、すべての教育が新兵教育に切り替えられ、苦労の第一歩でした。分隊長は海軍軍医大尉若田三郎（慈恵医大）で、分隊士は海軍看護特務少尉呉座終司、そのほか教育助手として水兵の一等兵と三年水兵が2人いました。

これからが本格的な海軍新兵時代です。毎日毎日の生活が計画され、看護科新兵も執銃教練がその主体でした。教班長の他に砲術教員として第六十六分隊の海軍一等兵曹が2人配属されました。毎日が嫌になるほど激しい訓練で身も心もくたくたでしたが、「俺は親も兄弟も故郷もあるんだ」と自らを慰めて

頑張ったことを思い出します。誰に聞いても私たち徴兵で入団した者は異口同音で、教班長クラスの志願兵より 21 歳まで娑婆^{しやば}で仕事をしていた私たちの方が幾分か良い方とっていました*4。どっちに転んでも同じ様な者同士、新兵生活の愛すべき思い出は何一つ残っていません。

戦後いつの日か読んだ本の中で、海軍兵学校の上層部では、下士官兵は品物と思えとの教育があったことを知り、なるほどなぁと思うことばかりです。日本の海軍の組織がこういう風な社会であったのかと思うと、涙の出るほどのことでした。

新兵教育中は毎日、朝食の前に軍人勅諭^{ちゅうよく}*5を、昼食の前には明治天皇の御製^{ごせい}*6を必ず大きな声で言うことが繰り返されました。

また、月に 2 回ほど引率外出がありました。新兵教育の最後は 2 泊 3 日の辻堂演習で、陸戦の訓練です。そのような生活でしたが、時間のたつのは同じことで 5 か月間の新兵教育は終了しました。

3 海軍病院での厳しい実地訓練に耐え

昭和 14 年 5 月 15 日、「海軍三等看護兵を命ず」の号令と同時に、私たち全員は横須賀海軍病院に配属され定員となりました。

海軍は練習分隊と定員分隊があります。勉強と仕事に分かれた分隊です。私たち海軍病院勤務は看護科員の実地訓練です。そうすると新旧交わる定員となります。つまり一等・二等・三等下士官、一等・二等・三等兵に分かれ、私たちは新三等兵で一番下っ端です。諸動作^{しよどうし}馳足^{かきあし}で大変厳しく、古い一等兵が毎日「整列」をかけ、二等・三等兵をぶん殴ることが続きます。新兵を終了してもこの勤務はいつまで続くのか。人が人を殴る、誠にもって不可解でした。

横須賀海軍病院は東洋一の病院で、ベッド数は 1500 床あります。その時の院長は海軍軍医中将中野太郎でした。病院へ来てから執銃訓練は一応卒業となり、もっぱら看護術の教育が始まり、座学が多くこれまた大変なことでした。

私の配置は最初が薬局で、その次が第七病棟です。この病棟にいた山梨県出身の古谷一看（一等看護兵）が大変温厚で、私たちの先輩で徴兵の人でした。あの人の真似をしなくてははと思いました。ところが、薬局の前任の一看がなかなかのやり手で随分殴られました。戦後、横須賀慰霊祭の席上、その元前任



黒川亮二氏
(横須賀海軍病院三等看護兵時代)

一看に向かって「私はあなたに随分殴られましたよ」と言ったところ、「あの時は仕方がなかった。我慢してください」との返事がありました。私は「それは違う。人間性の問題である。論より証拠。俺は海軍生活中、一度も兵隊を殴ったことはない。それでも海軍生活はできるんだ」と強調したのです。周囲に元看護兵が大勢いましたが、誰も私の言葉が間違っているといった人はいません。この一件は私の海軍生活に対する愛すべき思い出の一つです。

横須賀海軍病院勤務もいよいよ終わりに近づき、私たち兵隊が実習部隊へ巣立っていく時です。96 人の同年兵は横須賀鎮守府管轄の各艦船部隊へ、とはいっても艦船部隊の看護兵は古い兵隊でなくては間に合わない関係上、少数だけでした。横須賀海軍病院へ残る者や静岡県湊海軍病院と青森県大湊海軍病院への転勤が多く、その他の転勤先は、横須賀海兵团、横須賀砲術学校、横須賀工機学校、横須賀水雷学校、横須賀航空隊、追浜航空隊、横浜航空隊、館山航空隊、木更津航空隊、土浦航空隊、霞ヶ浦航空隊などでした。96 人が一斉に夢に見た実習部隊へ、転勤の発令は昭和 14 年 10 月 15 日でした。

私の実習部隊第一歩は鈴鹿海軍航空隊でした。三重県にあり地理的には呉鎮守府でありながら、横須賀^{よこすか}（横須賀鎮守府の略称）の管轄でした。

4 初めての实習部隊へ ～鈴鹿海軍航空隊～

横須賀海兵团と別れ、横須賀海軍病院の庁舎前の転勤者見送りの位置で号令があり、私たち転勤者は横須賀海軍病院の勤務者一同に見送られました。私は横須賀駅から大船駅乗り換えで東海道線を下り

名古屋に、そこから新宮線に乗り換えてその日の内に鈴空（鈴鹿航空隊の略称）へ到着しました。

同年兵は名波、青木、平岡と私の計4人でした。入隊して軍医官にあいさつ、看護長先任下士官、班長各下士官、先輩看護師へのあいさつは、入隊時の行事です。実習部隊転勤といっても、ここでまた新兵です。靴磨き、洗濯などの一番嫌な仕事が待っています。私たちより半年先輩は志願兵で、私たちとは次元が違います。柿坂軍医中佐を筆頭に軍医大尉、軍医中尉が2人で医者は4人でした。看護科員は、兵曹長1人と下士官・先任下士官が頭で計5人いて、看護兵青木先任と新兵4人の計10人の陣容でした。

鈴空は練習生部隊、要するに教育部隊で、司令官は海軍大佐市丸利之助です。朝から晩、飛行機の爆音に明け暮れる毎日です。しかし、横須賀海軍病院までとは違い、殴る、蹴るといった制裁は一度も無く、これが看護兵の特殊配置で、分隊の人員が少ないからです。ただし新兵には違いありません。ちょっとの油断もできませんが、飛行場救護が楽しい勤務でした。

普段は午前中診察、午後整備作業の繰り返しです。海軍では朝8時になると「診察」という号令が各部隊にスピーカーで伝わり、患者が次々に診察に来ました。その時の軍医中尉の1人が大島正光氏で、私たちは東大出のバリバリといって尊敬していました。大変御指導していただいた軍医官でした。戦後は東大教授となり、手紙を差し上げたところ、当時のことを思い出され御返事をいただき感激しました。航空医学の権威として有名な方です。

昭和15年5月1日、私は二等看護兵に進級しました。すると後輩たちが転勤してきます。その時は吉村、小出、鈴木三等看護兵の3人で、すべてのことを交代しました。海軍では、新兵四等兵は5月15日に三等兵、1年過ぎて二等兵、また1年過ぎて一等兵になります。そのように進級していきました。新兵教育は徴兵が5か月間、志願兵は6か月間でした。

二等兵になった5月の転勤者が病院船「朝日丸」からきた齊藤、早坂、内野の3人の一等看護兵でした。最初は怖い人が入ってきたなと思いましたが、温厚で人間味のある3人でした。ことに齊藤一看は静岡県浜北市宮口の出身で、面白い人で良く指導してくれました。徴兵の誇り高さ一等看護兵で、私たち若い兵隊は幸せでした。現在でも齊藤一看は忘れ

ません。後でまた書くことになります。

海軍では各部隊に医務科があり、軍医官、看護科員で構成されていました。ほとんどの病人は部隊内で処置され、重い病人や入院期間の長い病人が横須賀海軍病院に収容されました。

もう一つ海軍では、普通科練習生と高等科練習生と2通りあり、これは志願兵でなくては入れません。また高等科も同じ時間的任官資格ができてから入れるもので、期間は半年間です。徴兵が入るなら志願に切り替えていきます。私たち同年兵の中でも2、3人高等科へいきました。

鈴鹿航空隊という隊は、飛行機の偵察員の練習生を養成するので、外定員分隊という仕事の分隊があります。どの部隊でもそうですが主力部隊はやはり水兵で、続いて機関兵、主計兵、看護兵などの分隊があり、これらは隊内の仕事など隊の維持運営の分隊です。その中に練習生の外定員分隊があります。

隊内には酒保^{しゅぽ}や床屋があり、変な話ですが同じ床屋でも下士官は15銭、兵隊は10銭でした。

海軍では10日間の夏季休暇と一週間の冬季休暇があります。横須賀海軍病院の時の夏季休暇では横須賀より光明村まで帰ったことを覚えています。鈴空では昭和15年の冬に一週間の休暇がありました。

当時を思い出すと、戦闘機乗りの有名な本田一空曹（一等航空兵曹）が鈴空にいました。日本海軍の搭乗員の第一人者です。下士官でありながら士官等は何んとも思わない人で「士官、士官と威張るなら飛行機乗りの腕で来い」といつも言っていました。私たち兵隊から見ると大変面白い愉快な人です。坂井三郎の著書にも本田一空曹のことは出ています*7。歴戦の勇士が練習生部隊にいることはちょっと骨休みのため、また前線基地で腕を振るうことでしょう。飛行機乗りは太平洋戦争ではほんとうに花形でした。

鈴空も1年たつと看護兵の生活にも慣れて、楽しいこともありました。「整列」もないため殴られもせず、看護科の兵隊の良さを知りました。それゆえに「新兵時代はきびしく教育をするんだ」と聞かされました。水兵、機関兵、主計兵等は毎晩の「整列」で可哀想な場面でした。これも先輩兵隊の人間性によるものとさびしく感じた次第です。

人間が人間を殴る、いかにむごたらしいことか。それは海軍では表面に出てこないし、上官も皆知っ

ているのに何故阻止されないのか。日本人の心の中にそんな淋しいむごたらしい心がどこかに潜んでいたことが、海軍生活の中で最も心残りの種でした。私が海軍生活中、絶対に人を殴らないと心に決めたのはこの時点です。先の齊藤一看、早坂一看、内野一看の御指導と人間性によるものです。

その鈴空時代も終わり、昭和16年5月6日、転勤命令がきました。上海海軍特別陸戦隊です。

5 国際都市上海、浦東部隊の作戦とは

中国大陆での戦争が拡大していた時です。しかし、戦地勤務である以上、軍人としての本分であると当時は思っていました。海軍では自身の軍服、第一種軍装3着、第二種軍装2着、他にシャツ、下着、袴下、帽子等を入れる衣嚢があり、転勤する度に必ず持っています。鈴空で見送られ、その時も父親が来てくれました。名古屋に出て父親と2人で駅前の旅館でゆっくり夕飯を食べて、夜11時頃下り列車で佐世保へ。せっかく光明村から来てくれた父親と別れ、列車に乗りました。

明けて11時頃、佐世保軍港に到着しました。それから直ぐ佐世保海兵団に仮入団して、上海行きの船を待つことになりました。仮入団とは、転勤者の便宜を図るための方法です。その間、私たち仮入団の看護兵は佐世保海兵団の医務科の手伝いをします。ところが、しばらくすると医務科の前任下士官から「黒川、上海行きの便、今日あるからそれに乗って行きなさい」との命令です。医務科の看護兵も救護係としてその船に乗るから一緒に行けということで、到着して直ぐに上海行きの船に乗ることができました。何か小さい船で輸送船のようでした。前任看護兵に連れられて何も知らない佐世保の街を見ながら軍港を出港しました。5月のことで玄界灘は静かであり、気持ちの良い船旅でした。

翌朝、船から呉淞の街が遠くに見えてきました。それから何時間かが過ぎて黄浦江に入ると、川の水は泥色をしていました。だんだん陸が近づいてくると、当時、感じて覚えていることは中国人女性がズボンをはいていたことです。日本人女性しか見ていない私にとって異様に感じました。

船がさらに近づき虹口波止場に横付けされ、私はここで下船です。支那方面艦隊旗艦「出雲」も同じ場所に停泊しており、そこが司令部です。早速行

って「黒川が上陸（上海海軍陸戦隊の略称）へ転勤してまいりました。連絡をお願いします。」と頼んだのは一等水兵でした。すぐに連絡がとれ「迎えに行くからその地にて待て」との命令があり、一時間待っていると上海医務隊から機銃車（サイドカー付きオートバイ）が迎えにきました。「よろしくをお願いします」、「よし乗れ」と言われ陸戦隊へ向いました。約20分走ると威風堂々たる有名な大日本帝国海軍上海特別陸戦隊の4階建ての建物が見えてきました。



上海海軍特別陸戦隊本部

到着してすぐに軍医科士官、前任下士官、先輩等にあいさつにまわり、その日が終わりました。看護科の仕事はどこでも同じはずですが、上海医務隊に入隊後の私は、看護長の警戒兵として短銃を肩にかけ、毎日毎日、看護長の後をついて回る特殊な仕事につきました。短銃には実弾が入り、いつでも打てる状態で、これが戦地かと思うようになりました。

その仕事も約3か月で、私は浦東部隊に勤務地が決まりました。浦東は内地から着いた所の反対側で、上海特別陸戦隊本部から見て川向うに当たります。

当時の上海は治安も確立しており、時折テロ事件はありましたが、まあまあ平穏でした。上海の黄浦江に沿ってブロードウェイマンションがあります。38階建ての高層ビルは日本人として初めて見るもので、国際都市上海の雄姿でもありました。その前のガーデン



上海特別陸戦隊第三武装
(陸戦隊本部中庭にて)

ブリッジという橋の周辺に、日本租界とアメリカ・フランス・イギリスなど外国の租界がありした。ガーデンブリッジの中央に陸戦隊本部の番兵が銃を持って立っていました。海軍一等水兵たちです。

当時は日本の国力も大変なもので、欧米の各国とは別に尊敬されていました。やはり戦争は、国力の差に原因があると思いました。

浦東地区も割合治安が良いのですが、たまたまテロ事件があり非常警戒になっていました。その仕事は主力水兵の任務です。一方、私たち看護科の仕事は、治安確立のための^{せんぶ}宣撫工作として、中国人中心にチフスやコレラの予防注射を打つことでした。水兵の警戒する中で軍医官の指揮のもと、私たち看護科員の毎日の仕事です。「謝々、来々」と中国人も大変喜んでくれ、自分たちの子どもを優先していました。

その時の軍医官が青木貞章軍医大尉で応召の人でした。慶応大学医学部の教授で日本の細菌学の権威者で立派な方です。厚い御指導を忘れることはできません。夕方過ぎると背広に着替えて外出して行きました。私たち兵隊を大変可愛がってくれたことは、浦東部隊全員が感じたことです。

浦東部隊の周辺にはアメリカ・イギリスの会社があり、時々部隊に書面で連絡がありました。要するに英文書面です。当時の浦東部隊長は、兵学校出ではない特務*8大尉でしたが、英語がわかりません。そのため青木軍医長のところへきて、読んでもらう



浦東部隊医務隊（前列中央が青木貞章海軍大尉）

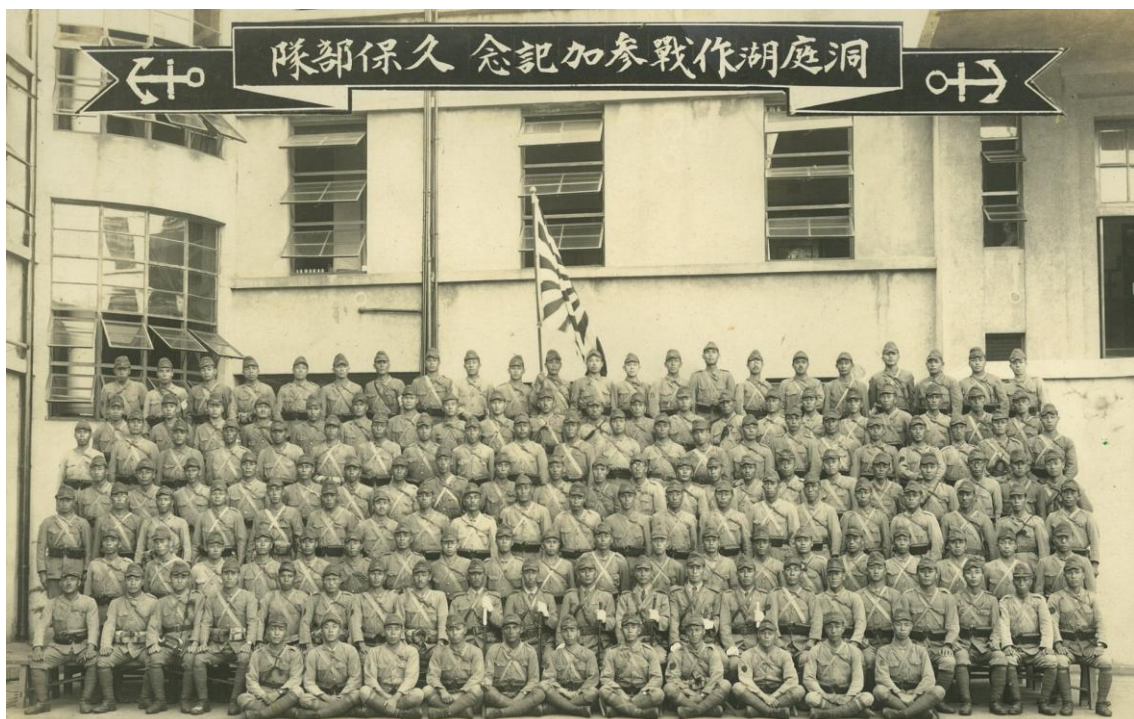
ことが度々ありました。青木さんは「同じ大尉でありながら英語も読めない奴は真にけしからん」といったような顔付きで、今でも思い出します。

その中で私に前線作戦の参加が命令されました。

6 広大な中国、洞庭湖掃海作戦に参加

部隊編制のため上海陸戦隊本部に集結し、隊長は久保海軍中尉で特務の人です。行く先はまだ分かりませんが、上海陸戦隊で一小隊、^{ナンキン}南京と^{ハンカオ}漢口陸戦隊で一小隊の編制で、上海を出港しました。当時、青木軍医大尉から軍艦旗を贈られ、上海陸戦隊医務科の皆さんの署名をいただきました。「元気に行けよ、死んだらいかんぞ」と元気づけられ、頭髮と爪を切って封筒に入れ、上海陸戦隊本部に預けました。

揚子江をさかのぼり一周間あまりで南京に着くと、



洞庭湖作戦参加記念写真（総員 160 人、黒川氏は最上段左から 2 番目）

そこで陸戦隊勇士と合流しました。南京を見学すると、孫文の墓が山の上から南京を見下ろしていました。南京は元蒋介石の都で、市内は城壁で囲まれ日本では考えられない風景です。南京に二泊し、また揚子江をさかのぼり一週間くらいで漢口に着きました。

漢口陸上警備隊に仮入隊して、上海、南京、漢口の三か所から集まった水兵を中心に部隊編制が完了しました。昭和16年6月頃と記憶しています。その当時、静岡県西部に大水害があり、かなりの死傷者を出したことを内地からの便りで知りました。

私たちの目的は、洞庭湖内の掃海作戦でした。D作戦^{*9}と名付けられた陸軍との合同作戦で、8月から9月までの短い期間の予定です。一個中隊編制で看護科員は下士官1人、兵2人。軍医は応召の士官で獄門沢軍医大尉でした。

城陵磯^{ジョウリョウキ}から洞庭湖に入り、大発動艇^{ドウタクテイ}に乗り換えて鹿角^{ロウカク}というところに駐屯しました。水兵を中心に毎日が掃討作戦でしたが、私たち看護科員は病人のない限りはお手伝い程度です。しかし、病人やけが人がでると血みどろの仕事をしなくてはなりません。この作戦はけが人もなく病人もなく良かったように思います。作戦というものは、1人の兵も死なず傷も負わず無血であることが良いことです。

2か月ほどたち10月になると下流へ引き揚げました。地上作戦だけで中国兵との交戦もなく、私たちが行くと中国人は誰もいないとのことでした。

中国大陆の広大さには目を見張るものがあります。その一か所、洞庭湖は向こうが見えないほど大きく、いかに広いかということです。揚子江ほどの大きな川は日本にはありません。大きい天竜川といってもほんの支流程度です。また、大陸性気候といって日

中は日本の夏くらい暑くて、夜になると日本の冬です。変な感じですが身をもって体験したことです。

上海に帰る途中、漢口で1週間くらい水上警備隊にお世話になり方々を見学しました。その下流の南京でも3日見学しました。船の中で寝て、昼間見学をして、見聞を広めることができました。

揚子江を下ること約2週間、10月半ばに私たちは上海に帰り、隊内歓迎を受けて浦東部隊に復帰しました。頭髮と爪を切って残していった作戦でしたが、無事に帰ることができ幸運の一言です。

7 再び上海へ、そして開戦を間近で見る

その頃、日米関係が悪くなってきたことが思い出されます。日増しにアメリカ相手の戦争が濃厚になるのが兵隊仲間の話題になってきました。

第一に、上海に駐屯するアメリカマリンの有名部隊が上海から撤退していきました。私たちの目の出来事でした。良く分かりませんでしたが、昭和16年12月5日の朝から上海陸戦隊本部も、私たち浦東部隊においても緊張がみなぎってきました。

12月8日朝、暗い内に日本の二等駆逐艦「蓮」^{くさくかん}がガーデンブリッジの前に投錨^{はす}しており異様な出来事でした。いつ来たか分かりませんが横付けのスタイルで、そこから軍使がまず英国砲艦ペテルレに向かいました。話の内容は知りませんが、帰る際に赤の信号弾が一発、二発と発射され^{*11}、時を同じくして日本の「蓮」から12cm大砲が火を噴きペテルレに命中し、ペテルレはすぐに白旗を掲げ降伏しました^{*12}。続いてアメリカの砲艦ウェーキも同時に降伏して白旗をかかげ、日本の水兵部隊が占領しました。

さすがイギリスだけあって、すぐに降伏せず実弾を見舞われてからの降伏でした。続いてアメリカ租



洞庭湖掃海作戦の行程が記された旭日旗^{*10}



大発動艇で洞庭湖内を掃海中の久保部隊

界、イギリス租界を上海陸戦隊の水兵部隊がいち早く進駐して、各部隊で占領しました。アメリカ租界の中には、日本では戦後にできたボーリング場があり、私たち兵隊が「これは何でしょう」と顔を見合わせたもので、昔話の語り草です。

同日、日本海軍の水上機が5機、また10機と上海上空を超低空で威嚇編隊飛行を繰り返し、中国人も「トンヤン、フイチエ、タダデュウ（日本の飛行機たくさんあるという意味）」*¹³を繰り返し口にし、私たち浦東部隊の兵隊と話していたことを今なお良く覚えています。過ぎし日の思い出の一コマです。

上海での開戦も一区切りになり、ハワイ空襲から始まった戦争も、南方各部隊の戦果の喜びもあり、上海陸戦隊の勇士も至極のんきになっていました。

昭和17年2月1日、普通善行章一線が付与されました。善行章とは、階級章の上に「へ」の付いている章で、これが大変にもという代物です。善行章の無い者は海軍兵隊にあらずといったところです。満三年勤務した者に与えられ、一日一銭五厘の加給が付きます。善行章5本の下士官、また3本の兵隊もありました。2本の兵隊の外出は下士官と同じです。善行章4本以上は2/3外出*¹⁴、下士官二等の兵隊は1/2外出で、二等兵以上の兵隊は1/4外出でした。ゆえに海軍部内の兵隊は下宿を持っていました。

そして一年近くがたち、私にまた転勤命令が発令されました。行く先は横須賀潜水艦基地隊です。ひとまずそこに転勤しますが、その先は先任下士官でも分からないらしく、とにかく内地母港であることに間違いないということでした。

8 再び横須賀へ、徴兵でも下士官に

私たち内地へ帰る兵隊は、海軍が30人くらいで、1万トン級の「長崎丸」に乗りました。航海中、海軍の兵隊は全員、夜の玄界灘の見張りに着きました。もうその時に見張りが必要かと思うと心細くなってきました。上海から長崎までは僅か一昼夜です。その一晩でも見張りが必要ということです。船自体の専門の見張りはいるでしょうが、海軍の兵隊として応援の意味での手伝いです。何かあれば、何か見えれば知らせる。これが見張りの役目です。わずかな玄界灘の海で、絶対の制海権をその時既に失くしていたということです。

昭和17年11月24日、無事佐世保に横付けしま

した。私たちは下船し、今度は汽車で横須賀まで、懐かしの母港に向かいます。

横須賀に着き、波止場の番兵に「横須賀潜水艦基地隊に転勤してきました」と告げると、その番兵が調べてくれました。潜水艦基地隊は横須賀防備隊の中にあることがわかり、防備隊がある田浦へ向かいました。防備隊の医務科で齊藤先任下士官にあいさつをしました。看護員は三浦一看下士官1人で、他に軍医少尉がいました。そこで私は医務科へ仮入隊して、私が乗る潜水艦が何号になるのか待つことになりました。167号*¹⁵潜水艦でしたが、その潜水艦はどこにいるか分からないとのことでした。

2週間ばかりたつと、軍医少尉分隊士から「黒川は潜水艦講習をどこでやったか」と聞かれ、分隊士に「私は今まで戦地勤務でした。講習会等やることはありません」と答えると、「そうかそうだろうな」と言われました。看護兵といえども講習会を受けていない兵隊は潜水艦には乗せないとのことで、その日から私は潜水艦から横須賀潜水艦基地隊に勤務が変わりました。私の代わりに岩本二等看護兵が乗りました。私はまた命が助かったと思いました。

内地に帰ると、その頃、月に二、三度新兵が入団してきました。私たちには身体検査の用員としての仕事が待っています。毎日海兵団通いに明け暮れ、看護兵の仕事もなかなか大変でした。こんなことになり、戦争は大丈夫か。またその頃は物資もなく、世間の人々の淋しさも私たち兵隊に伝わってきます。どうしてこんな戦争をしたのか、隊内でも兵隊それぞれの話に花が咲き面白いほどでした。最前線でアメリカにやられた兵隊は戦争に負けると言い、そうでない者は大丈夫だと言う。公式にはそんなことは言えませんが、負けると言う兵隊の方が多かったと思います。それが昭和17年の暮れのことです。

横須賀潜水艦基地隊の医務科には病室がなく、防備隊の医務科にお世話になっていました。防備隊は若い兵隊ばかりで、私たちのような古い兵隊はいません。兵隊も4年たつと古参兵となり、勤務にも余裕が出てきました。

昭和17年も暮れて昭和18年になり、戦争はますます厳しく、負け、負けといった状態で、国力の限界が見えてきました。あの昭和16年12月の開戦当時、上海での日本の勝戦も今は夢のようなことです。

昭和18年5月1日付けで任官という出来事があり二等衛生兵曹になりました。私たち徴兵の兵隊は何年海軍にいても一等兵が限度で、それ以上は考えていませんでした。ところが、昭和17年に海軍の級が変わり、徴兵でも下士官になることができました。

私たちは下士官教育を防備隊で行いました。下士官のプライドとしての教育が主でした。下士官になると医務科の仕事は、診察はもちろんです。書類事務の仕事をするようになります。何も難しいことはなく下士官教育は約2か月でした。下士官になると配置も違ってきます。新兵教班長も務めました。

下士官になり約半年潜水艦基地隊にいましたが、そこでまた転勤命令がきました。前任下士官からまず千葉県館山砲術学校へ行くように言われました。

9 北方に進出せよ！ 館山と横須賀の砲術学校

10か月ほどお世話になった横須賀潜水艦基地隊を出発して陸路館山へ向かいました。東京駅で乗り換え館山駅へ着きました。ここには館山航空隊があり、この航空隊は実戦部隊でした。

館山航空隊から8kmほど離れた砲術学校にはバスに乗って行きました。もちろん医務科へ行き、砲術学校の前任下士官他にあいさつをして仮入隊しました。そこに竹内一看、古谷・木村三看が私を待っていてくれ、無事に到着すると3人共に気を楽しんだ様子でした。3人の兵隊は砲術学校の医務科を手伝っていましたが、私は「下士官は休んでいてください」という前任下士官のお言葉で、しばらくはゆっくり過ごせました。

10日くらいたつと部隊編制に着手、隊長は勝村大尉でした。看護科員は私と竹内ら兵3人の計4人でした。部隊編制も終わり出発です。館山から水路横須賀に向かい、横須賀砲術学校に仮入隊しました。勝村隊長以下、兵曹長4人、主力水兵部隊、機関科部隊、主計部隊、医務科員、総勢約300人。高射砲6門、探照灯3基、これが部隊の主力兵器でした。これらを横須賀兵器廠から受け取り、私たちは医療品や薬品を海軍病院から受け取り準備を進めていました。

はじめは南方面への進出命令でした。後で分かったことですが、マキン島、タラワ島へ行く予定でした。ところが、その命令が出てから1週間後に勝村部隊は「北方に進出せよ」との変更があり、私たち兵隊は文句たらたらでした。何故かという、南方と北

方では第一に着るものが違い、また食べ物も違う。北方へ行くとなると石炭まで積み込まなくてはならない等々、大変な変わり様だったからです。

これも戦後分かったことですが、私たちが進出してから同じ館山砲術学校で編制された中村部隊はマキン・タラワで玉砕しました。運命のいたずらか、私たちの運が良かったのかと思い出しています。

10 極寒の千島列島最北端での戦い

勝村部隊は昭和18年10月、横須賀から輸送船に乗り、一路北方に向けて出港しました。敗戦のはしりの時代です。いつ潜水艦によって魚雷攻撃を受けるか分かりません。見張りも嚴重に3日間の航海でした。出発時、横須賀まで父と弟英吉が面会に来ましたが、何が何だか分からぬ内に別れました^{*16}。

行き先は北方の最北端の^{シムシウ}占守島^{*17}でした。上陸すると、そこにはキスカ島から逃げてきた撤退部隊^{*18}がいて、命からがらといった状態でした。占守島上陸は昭和18年10月半ばと記憶しています。

まず私たちには寒さとの戦いが待っています。雪はまだ降っていませんが、去年の残雪は至る所にあります。1か月くらいは幕舎生活で大変でした。

キスカ撤退部隊の兵隊にいろいろな話を聞きました。第一に戦争は負けるとのこと。飛行機の爆音を聞くとみんな耳を押さえ黙って頭を下げます。いかにキスカで爆音が凄かったかということが分かります。戦後、キスカ撤退作戦という海軍の映画がありましたが、生き残っていた海軍の兵隊はどんな心持で見たことでしょう。戦争爆撃恐怖症といいますが、人間がそこまで追い込まれた事実を見て私たちも驚きました。

私たちは北方の守りに着くために占守島へ集結、続々と後続部隊がきます。その本部は第五十一警備隊という名称でした^{*19}。いつの間にかキスカ撤退部隊は内地に帰り、私たち第四十二防空隊は^{*20}、やがて第五十一警備隊に吸収されたのです。

占守島の生活と毎日の陣地構築という仕事は大変でした。この部隊は応召部隊で30～35歳くらいの新兵です^{*21}。家に帰れば妻もあり子供もあり一家の主人ですが、新兵になればやはり新兵の扱いで可哀そうでした。身体も弱いし気力も乏しく日本海軍もすべての体力、戦力が低下したことをつくづく感じました。

陣地が出来上がり、高射砲6門、探照灯3基がす

べて揃いました。兵舎は三角兵舎という屋根だけ地面に出たものです。11 月半ばには雪が降ってくるので、耐寒用の建築様式です。

昭和 19 年になると太平洋戦争もいよいよ深まり、日本の運命もだんだん低下していき心配になってきました。アメリカの爆撃機コンソリデーデットが毎日のように来襲し、数多くの爆弾を雨あられと投下して帰っていきます。日本の高射砲も物凄く発砲しますがなかなか当たらず、アメリカの戦力が物凄いことを初めて知りました。

昨年 11 月から降り始めた雪が一夜にして 1 m、3 m と積り、極寒の地だけにさすがと感じました。本土最北端の地だけあって一面銀世界で、スキーのみが移動手段です。毎日毎日のスキー訓練のおかげで、スキーは大変上手になりました。

5 月になると幾分暖かくなってきました。昭和 18 年、新兵教班長だった頃に横須賀海軍病院の鈴木崑代治兵曹と仲良くしたことを思い出しました。同年兵の私たち徴兵の兵曹が教班長なんて考えられないことでしたが、新兵にとっては徴兵教班長だけに幸せだったことと思います。その鈴木兵曹が 5 月に内地から占守島に部隊編制で上陸してきました。懐かしさのあまり「やあ鈴木」、「黒川」と言葉を交わし抱き合ったものです。私たちと同じく防空隊の一つとして、やがて第五十一警備隊に入っていきます。その鈴木兵曹は神奈川県出身で、その後も付き合いがあります。同年兵の絆と申しますか面白い人です。

毎日の爆撃では私たち看護科員は防空壕へ逃げ込むことが仕事になりました。占守島には零式戦闘機があり、また月光といった夜間戦闘機も 10 機くらいあったようですが、アメリカ機の空襲になると零戦は飛び立っていくけれど何の戦果もありません。海軍予備生くらい訓練不足のパイロットでは、どうすることもできません。かつて昭和 17 年、ミッドウェイ空戦の敗退で当時日本の優秀なパイロット 3,500 人が死亡したとの報もあり残念の至りです。

11 徴兵の下士官としての意地

昭和 19 年 5 月 1 日付けで一等衛生兵曹に進級しました。戦局の悪化もあり、日本もいよいよ悪い方向に向かっていると思いました。私は下士官になって一年がたちましたが兵隊は一切殴りません。むしろ先輩下士官と意見が合わなければ、とことん喧嘩

をするようになり、部隊では煙たがられていたことも事実です。これは自分の持って生まれた性分ともいいますか——。要するに軍隊内の私的制裁に大いに反感を持っていましたので、兵隊は私を大変慕ってくれました。同時に上官として責任だけは全うしました。前任下士官であろうと先輩下士官であろうとおかまいなし。その原点は「みんなは皆志願兵で、俺は徴兵である。次元の違い」と心に強く持っていたことです。竹内一看、古谷・木村新兵を随分可愛がりました。今でも当時の古谷三看には感謝されています。軍隊内のきびしいことは分かります。私の海軍生活中 7 年間、殴られても決して殴らない、これが私の本質です。

第五十一警備隊医務科の前任下士官に「黒川兵曹、頼むで頼むでなあ」と良く言われました。一度、第五十一警備隊本部医務科内で、私より半年先輩の志願兵の兵曹と口論しました。「お前ら志願兵とは」と、私たち選ばれた徴兵の意気を見せていたところ、軍医大尉が仲に入り私も承知したことを思い出します。私は、「志願兵の要点、進級と恩給がなくともお前たち軍隊に来るか？ 私たちは何年兵隊でも兵役の義務だけで来ているんだ。考え方の違いははっきりしている」。ただ中には応召の士官もいます。彼らには私は従順でした。今、思えば若い 20 代の時に死んでも良いという覚悟を持っていたため怖いものなし。金もいらない、進級もいらない、無欲の結果です。

入団して 6 年、7 年たつと手のつけられない兵隊もたくさんいました。海軍ではこれを「ジャグっている」といいます。第五十一警備隊本部には志願兵ばかり 2 人、防空隊の看護科下士官は私たち延期組^{*22}だけです。始末の悪い下士官は各部隊へ、本部だけが本来の姿です。

毎日毎日の爆撃も朝、昼、晩と続きます。時には超低空で機銃掃射があり、味方の 25 mm 機銃が火を噴くこともありました。そんな時、日本ではあまり弾を使うなということで、撃ちまくれなんていうことはなく、ただ敵飛行機のなすがままの状態です。残念ですが国力の差でしょう。あまり弾をうつと補給がないからでしょうが、残念の極みです。

昭和 19 年の 7 月頃、占守島は非常に気候の良い時でした。第十二航空艦隊司令部^{*23}が占守島へ進出してきました。司令長官は海軍中将戸塚道太郎、

上層部のことは知りませんが、医務科下士官で昭和11年徴兵の齊藤兵曹が占守島へ来ました。第五十一警備隊本部に泊まっていて、わざわざ四高射*24に「黒川はいるか」と訪ねてきました。私より3年先輩です。顔を見るなり「元気で何よりだ。その内に我らの自由な日が来るから安心しろ」と言っていました。司令部にいて、いろいろな情報が入り戦争のことも私たちより多く知っています。その関係で敗戦を自由な日と言い換えて、私に言ったことを今日でも忘れません。懐かしい限りです。1か月間ほどいましたが、また北海道に帰っていきました。

空襲は相変わらず続き、双発発動の艦上機が6機編隊又は12機編隊で占守島を上空から爆撃して帰っていきます。その間3機は日本の高射砲が撃墜しましたが、敵に与えた効果はほとんどありません。今思うと昭和18、9年頃には敗戦という厳しい試練が既に現実となって襲ってくるような感じでした。

昭和19年も終わりに近づき占守島生活も約1年が過ぎました。水兵主体の戦闘員は大変ですが、非戦闘員である私たち看護科員に言えることは零下40度の極寒生活の大変なことです。敗戦の色濃い昭和20年になっても毎日の爆撃は一向に減らず、定期便になった感がありました。

昭和20年5月にまた進級して海軍上等衛生兵曹になりました。これも戦争のお陰です。良くも悪くも思いません。感激など全然ありません。

12 内緒の治療

問題の多かった占守島生活も足かけ3年になると慣れてきて、毎日が平凡になってきました。爆撃の敵機が来る度に戦闘部隊は力の限り戦いますが、私たち非戦闘員は防空壕で待機です。けが人も出ませんでしたが、ある時、アメリカの投下した爆弾を四高射の1人の水兵が拾っていろいろ調べている時、火が出て大変な火傷をしました。第3度熱傷でした。勝村隊長がお見えになり「黒川看護長、これは第五十一警備隊医務隊へ送るべきところ、故あって内密で治したい」とのことです。私も自信はありませんでしたが、「隊長がそういうことなれば必ず治して見せます」。火傷の治療薬品を第五十一警備隊本部に取りにいき、前任下士官に事情を説明しました。前任下士官も黒川の立場もあることであろうといって、薬を十分に内緒で分けてくれました。早

速治療です。私はかつて鈴空時代に大火傷をした兵隊を治療したことを思い出し、その方法で治療しました。「必ず良くなるから安心しろ」とその兵隊に言い聞かせ、一所懸命にやりました。

勝村隊長も時々来られ「どうだ」と言い、私は看護長として「大丈夫です。安心してください」と答えます。治療も約2か月で良くなり、みんなで喜んだことも思い出の一つです。勝村隊長から御苦労様といって清酒1本いただきました。

内緒の治療したことは後にも先にもただ一度です。内緒の治療とは軍医官に見せず看護兵だけで行うことで、悪くなって手をつけられないようになった場合を考えると恐ろしいことです。無論、患者日記(カルテ)もなく、責任も重大です。その兵隊も大変喜んで、班長も来て「黒川兵曹ありがとう」と頭を下げてくださったことも思い出です。

看護科員の仕事という相手は病気あるいはけが人です。非常に地味で陰の仕事です。華々しいことは一切ありませんが、相手が人間である以上、真剣です。「職務は種々にかかわらずもつくす誠は唯一つ」という軍歌「艦船勤務」の一節にあるように、平凡な間にも意義深い仕事でした。同時に上官は、海軍士官の中でも一番高度な学問を修め、すべて医大出の紳士的な人ばかりです。兵学校出の海軍士官を上から見下しているような感じで、私たちには大変ありがたく嬉しいことでした。いろいろ勉強も教えていただいたことを思い出します。主計科士官、医務科軍医官はそれぞれ大学出の人でした。

20歳代の青春の時を過ごした占守島にも別れることになりました。陸軍と交代する作戦により海軍部隊は一部を除き撤退することになりました*25。

♪ 薄いベールの薄いベールのとばりの中で 春の占守を物思ふ ♪ このような歌が当時の占守島で流行しました。人間がいる防空部隊で歌を作り、守備部隊全員が合唱した懐かしい歌です。人間が住めばやはり歌があり、歌を作る人間もあったということです。

13 内地へ帰る時の忘れぬ思い、そして終戦

内地帰還の思い出は今も忘れません。私は部下3人を連れて一緒に占守島へ転勤しましたが、昭和20年に内地に帰るその時のことです。私と竹内一看は帰るが、古谷、木村三看が残ると発表されました。

人事の問題ですが、私は考えました。昭和18年に

古谷、木村両新兵を連れて行くにあたり彼らの両親から「よろしく頼む」と言われました。これはどうしても一緒に帰らなくてはいけないと思い、真っすぐに医務隊分隊長に談判にいきました。「分隊長、私と竹内、古谷、木村4人は館山砲術学校以来、いつも苦労を共にして今日まで参りました。古谷、木村を島に残すことは私にはどうしてもできません。どうか私たちと一緒に帰してください」と強く、強く申し上げました。「それから私たちより後に来た兵隊も私たちと一緒に帰ることになっております。私にはどうしても納得できません。異動するなら古谷、木村も一緒に帰してください。お願いします。途中、潜水艦に撃沈されるようなことがあっても4人一緒ならかまいません。それまでの寿命と思います。分隊長お願いします」と頼みました。

その時、分隊長は「良く分かった。それなら黒川兵曹の言い分を聞こう」と言ってくれました。本当に良かった。本来なら分隊長軍医大尉と交渉するなんて思ってみませんでした。この時の私の気迫は凄いほどでした。帰ってきて木村、古谷にそのことを話して、みんなで帰れると喜んでくれました。

進級も、名誉も、金もいらぬ者ほど強い者はないと思いました。分隊長あるいは相手が誰であろうとぶつかっていく、敢行する、この気迫だけは徴兵が持っている気構えです。こうして私たちは勝村部隊として、館山砲術学校で部隊編制以来2年間、第四十二防空隊から第五十一警備隊になり、看護科員黒川、竹内、古谷、木村4人は共に内地に帰ることができました。このことは50年近くたった今まで忘れることができません。神奈川県に住む古谷さんもこのことを覚えていて、長い話の種になっています。

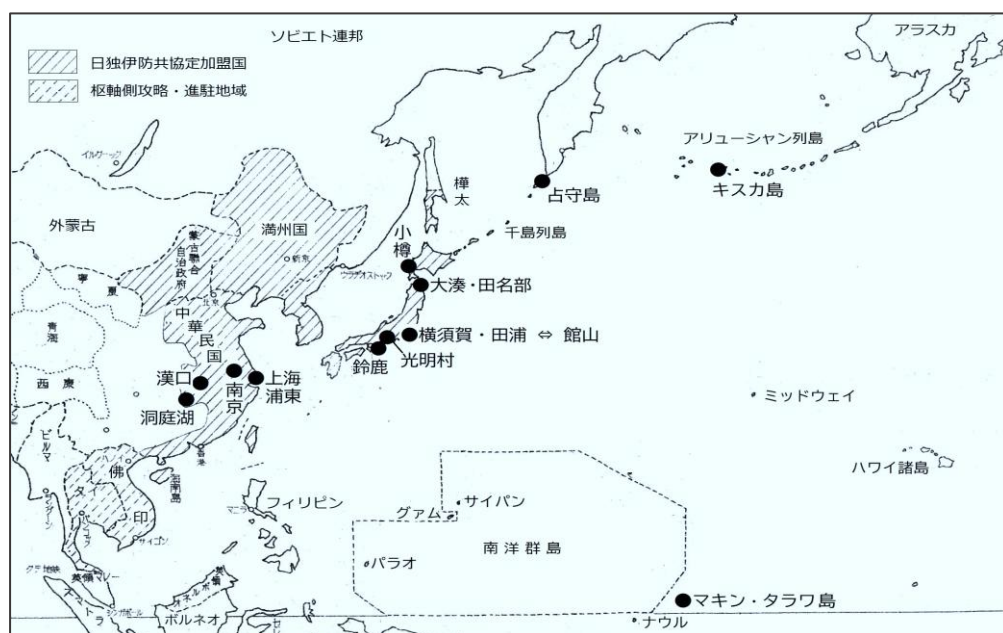
私たち2年間の苦労を重ねた厳寒の地、占守島と別れる時がきましたが、館山砲術学校から一緒であった水兵、機関科の兵隊とは別れなくてはなりません。

私たちは「浮島丸」に便乗して占守島片岡湾を後にしたのは昭和20年7月5日頃と思います。

帰ることは嬉しいのですが、帰途アメリカの魚雷攻撃があります。一発で私たち乗員はオホーツク海の海底にいくことになります。これも運を任せて考える外に方法はありません。途中、いろいろ逃げるようにしての航海が続きました。魚雷攻撃です。命からがらといったところでしょう。海軍の兵隊が海の上で命からがらなんて考えられないことですが、それほどまでに戦況は不利、負け戦の様相でした。

ようやく小樽港にたどり着き、助かったと感じました。同時に竹内、古谷、木村の3人も帰り感激しました。翌日、大湊港に入港した後、田名部町（現、むつ市）に上陸すると、毎日が幕舎生活でした。内地に帰ってもどこへ行くでもなく、何をしろでもなく、成り行きを見守るしかありません*26。海軍もこれで駄目だと思いました。士気も全然なく、ただそこにいるだけです。敗戦に近づいていると思うばかりです。

その頃、一番記憶に残っているのはアメリカが東北地方に500機の艦上機で攻撃してきたことです。無抵抗の一般市民に対する機銃掃射ということは、つまり日本の近海に艦上機を搭載したアメリカの航空母艦がいたということです。昭和20年8月に入ったばかりでアメリカの戦力の強大さを感じました。その時、東京、神奈川、名古屋、大阪地方にはB29アメリカ重爆撃機が200、300機といった大編隊で爆撃を続けていました。日本の戦力はゼロに等しいです。



この手記に登場した主な地名の所在地
(昭和16年12月発行『地理学』10-1 附録「最新世界情勢図」の部分に加筆)

かつては世界第一を誇る零式戦闘機があり無敵海軍でした。あれから4年間の戦闘で日本は戦力ゼロになり終わった感じです。日本人の中には大変苦労している人もいるし、占守島に残してきた勝村大尉以下約300人の兵隊はどうしているのか心配です*²⁷。昭和16年頃、中国の上海陸戦隊に勤務していた時を想い出すと戦力また物力等、隔世の感がありました。

戦後、読んだ本の中に、日本の海軍大将3人が大東亜戦争に反対した理由は、物量的にアメリカにはどうしてもかなわないとの気持ちを強く持っていたからです。昭和20年の戦力の低さといいますが、昭和16年にそのことを考え、戦争に反対していた。なるほどと思います。その大将らは既に昭和18年には戦争に負ける準備をしていたそうです。

日本では物資も油も無く困っていた時、アメリカでは物量が豊富でした。広い南方での戦いの裏に物量を誇るアメリカ、なんとすごいかと感心しました。

昭和20年8月半ば、暑い夏でした。やがて戦争の負ける日が近づいてきました。そして天皇陛下の放送があり、将兵はみんな涙を流していました。日本は物量よりも人的資源があり、どこまでも闘うという陸軍の考え方があったようです。それを見極めて天皇陛下のお言葉だなと感じました。

以上



黒川亮二氏と“太郎”（浦東にて）

謝辞

黒川亮二氏御子息の哲司氏と喜久雄氏には手記の公開にご快諾をいただき、亮二氏のアルバム「中支の想出」や従軍履歴に関する資料を用意していただきました。ここに記して感謝を申し上げます。

本文中に使用した写真はすべてこのアルバムから掲載しました。

（手記編集担当：郷土資料室 佐藤明生）

注釈

- 1 口述筆記原稿の文字データ化について。

常用漢字と現代仮名づかいを基本に編集した。地名等の誤記は訂正し、重複する話題は適宜割愛、時間的に前後する箇所は段落を入れ替えた。文字化することで話者の抑揚がなくなり読みづらくなった箇所は助詞や接続詞を補った。そのほか、ルビ、本文中の見出し、注釈は編集者による。

口述筆記の時期については、徴兵検査を受けた昭和13年を「50年前」と記すこと、御子息の黒川哲司氏が昭和の末頃と記憶されていることから、昭和63年とみてよいだろう。亮二氏はその後、平成3年5月に72歳で亡くなられた。

- 2 身長155cm以上、身体強健で現役に適するものは骨格の程度に応じて甲種、第一乙種、第二乙種に区分した。現役に適さないものは第二国民兵役として丙種（徴集対象外）、兵役に適さないものは丁種（兵役免除）とした。ただし、甲種等で合格しても現役はくじで決められた。くじに外れたものが第一補充兵役で、海軍では1年後に第二補充兵役になる。また、兵役を常備役（現役及び現役を終えた予備役）と後備役（常備役を終えたもの）に区分するが、第二補充兵役と後備役は第一国民兵役として、有事の際や欠員の状況に応じて召集の対象になった（以上、昭和13年当時。注21・22参照）〔文献(3)より〕。

- 3 武器や食糧等の軍需品の輸送及び補給を担う兵科。

- 4 志願兵の採用年齢は、「兵役法施行令」第7条では17歳以上徴集適齢未満、「海軍志願兵令」第26条では15歳以上21歳未満。一方、徴兵の適齢は20歳である。

そのため、黒川氏ら徴兵は娑婆（俗世間）での経験の乏しい志願兵を世間知らずとみている。

- 5 軍人勅諭の全文は長いため、次の「聖訓五箇條」を唱えた。「一 軍人は忠節を盡すを本分とすべし、一 軍人は禮儀を正すべし、一 軍人は武勇を尚ぶべし、一 軍人は信義を重んずべし、一 軍人は質素を旨とすべし」〔資料(5)より〕

- 6 天皇が記した和歌や詩歌。例えば、黒川氏と同期の四等機関兵・工作兵の海兵団修業記念写真帖には、次の明治天皇の御製を掲載する。「ますらをに旗をさづけていのるかな 日の本の名をかざやかすべく」、「朝なみおやの神に祈るかな わが國民を守りたまえと」ほか〔資料(5)より〕。

- 7 坂井三郎著『坂井三郎空戦記録』講談社、同『大空のサムライ』、『続大空のサムライ』、『大空の決戦』光人社（以上、中央図書館蔵書分）。これらの書によれば、本田敏明飛行兵曹は、昭和17年5月13日にポートモレスビー攻略戦の際に撃墜された。享年22歳8か月。

- 8 特務士官とは下士官から任官した海軍士官のことである（『広辞苑』）。正規には兵学校や機関学校等を卒業して士官になる。士官とは少尉以上の階級〔文献(3)より〕。

- 9 D作戦とは、漢口に司令部を置く第一遣支艦隊が上海特別陸戦隊と支那方面艦隊附属飛行機隊の協力を得て行った洞庭湖掃海作戦である。長江（揚子江）から洞庭湖を経て長江の支流である湘江に通じる航路の確保を目的とした。『戦史叢書』では期間を昭和16年9月1日から10月10日とする〔文献(1)より〕。ただし、作戦の工程を記す「旭日旗」は、8月24日にはこの作戦が始まっていたことを示す。

- 10 「旭日旗」に記された内容は次のとおり。

洞庭湖掃海 D作戦〔湖南省〕

昭和拾六年八月貳拾四日 17.30 分 懷シキ上海ヲ発動
 缶州鹿角間大掃蕩 洞庭湖鹿角一帯 大掃蕩戦ニ参加
 昭和十六年九月十七日 洞庭湖九馬嘴敵前上陸
 昭和十六年九月十九日 洞庭湖鹿角敵前上陸
 昭和十六年九月二十日 青山敵前上陸
 昭和十六年九月二十三日 營田敵前上陸
 昭和十六年九月二十八日 洞庭湖磊石山敵前上陸

- 11 日本軍の降伏の勧告に対して拒否をした場合の合図で、これを機に砲撃することになっていた〔文献(1)より〕。
- 12 真珠湾攻撃の報告を受けて朝5時頃、降伏勧告の軍使2人をペテルレとウェーキに派遣した。『戦史叢書』では、ペテルレは駆逐艦「蓮」と砲艦「鳥羽」の集中砲火を受け瞬く間に沈没したとする〔文献(1)より〕。
- 13 “タダデュー”は“多い”の意味であろうが解明できず。当時の状況から「東亜飛機多得多 トンヤン・フェイチャー・トウオタトウオ」ではないかと本市国際交流・基地政策課渡辺博子主査からご教示を得た。『戦史叢書』によると、飛行機から「市民よ安かれ、危害は加えない」というビラを撒いていたという〔文献(1)より〕。
- 14 「2/3 外出」は3日に2回の外出が可という意味と考える。「1/2 外出」、「1/4 外出」も同様。
- 15 潜水艦の艦名は不詳。伊・呂・波のどの型でも167号はない。例えば、伊66, 68は昭和17年5月に伊166, 168に改名しているが、伊67は昭和15年8月29日に沈没し除籍済〔文献(3)より〕。
- 16 亮二氏と面会した英吉氏の後日談によれば、亮二氏は「今度の進出は、軍機で言えないが厳しい場所であり、帰ってこれないかもしれない」と覚悟を決めていたという。
- 17 占守島は面積388km²、最高海拔189m〔朝倉書店『世界地名大事典』〕で、角張った歪な卵型、砲弾型を呈する。

占守島の概要〔資料(6)より〕：平坦で雑草の茂る景観だが、小渓谷が多く水は豊富。植生は五葉松とハンノキが主体で、ガンコウラン等の高山植物が茂る。土質は耕作が容易で、農工隊が開拓して野菜を栽培。サケ・マス・タラ・カニなどの海産物が豊富で、これらを缶詰や塩漬けに加工し、軍部に納入していた。島内に缶詰工場が2か所あり、降雪のない5月末から9月末まで稼働し、数百名の若い女性工員が従事していた。



〔参考〕黒川氏と同時期に警備隊付技手として占守島に従軍した土屋良助氏／昭和18年11月、占守島にて（郷土資料室蔵）

- 18 キスカ撤退作戦。昭和18年5月30日のアッツ島玉砕後の作戦。同年7月29日にキスカ部隊の5,183人が濃霧を

利用して米軍に察知されることなく撤退し、占守島やその隣の幌筵島に避難した〔文献(2)より〕。

- 19 昭和18年5月18日、アメリカ軍の攻撃に対する北方の防備強化のため第十二航空艦隊を設置し、8月5日には第五艦隊と共に北東方面艦隊を組織した。第五十一警備隊はこの北東方面艦隊に編制された千島方面根拠地隊の一つの部隊で、本部を占守島片岡基地に置いた〔資料(4)より〕。
- 20 第四十二防空隊は第十二航空艦隊の付属部隊として昭和18年9月20日に設置され、第九・第六十一防空隊と共に占守島の防空を任務とした。手記のとおり第五十一警備隊に吸収され、昭和18年11月10日に戦時編制から除かれた〔資料(4)より〕。
- 21 「身体が弱いし気力も乏しく」という表現から、注釈2の丙種＝第二国民兵役の該当者であろう。昭和16年9月と11月の兵役法施行令改正により、現役としての召集を可能にした。昭和18年10月当時の招集年齢は40歳までで、翌11月には45歳までに改正された〔文献(3)より〕。
- 22 海軍の徴兵服役期間は3年で、その後予備役に入るが、戦時下で現役が延期された兵のこと。
- 23 昭和19年4月下旬から同年8月9日まで北東方面艦隊の司令部が占守島片岡基地に置かれた（通常は千歳航空基地）。戸塚道太郎（最後は横鎮司令長官）は第十二航空艦隊司令官も兼務していた〔資料(4)より〕。
- 24 「四高射」とは四高射隊のことである。一から七高射隊まであり、占守島北東部に設営された（北東空隊）〔資料(6)より〕。一方、片岡基地は島西端部にあり遠く離れているため（20km以上？）、齊藤兵曹はわざわざ訪ねてきてくれた。
- 25 北洋作戦。海軍による千島列島からの内地転進作戦であり、手記のとおり陸海軍は交代した。4月中旬に始まり6月12日には千島方面根拠地隊は解隊して大湊警備府部隊に編入された。黒川氏らは最後の撤収組で、通信隊等一部は残留した〔文献(1)・資料(4)より〕。
- 26 大湊警備府内の海軍病院ではなく、旧田名部町内に開設された大湊海兵团で新たな部隊編制を待っていたのか。
- 27 昭和20年8月8日、ソ連は日本に対して宣戦布告した。占守島では終戦の「詔書」以後も攻撃を受けたため、日本は陸軍主体に防戦した。その後、23日には停戦協定が成立したが、占守島残留の日本軍兵士はソ連軍の捕虜となりシベリアに抑留された〔文献(1)・(2)より〕。

参考・引用文献、閲覧資料等（辞典・事典類は除く）

- (1) 防衛庁防衛研修所戦史室 1975 『戦史叢書 中国方面海軍作戦〈2〉』、『戦史叢書 本土方面海軍作戦』株式会社朝雲新聞社
- (2) 服部卓四郎 2007 『大東亜戦争全史』新装版第3刷株式会社原書房
- (3) 財団法人海軍歴史保存会 1995 『日本海軍史』全11巻第一法規出版株式会社
- (4) 防衛省防衛研究所 「昭和18年5月18日～昭和20年6月30日 第12航空艦隊戦時日誌 北東方面艦隊」 レファレンスコード=C08030024900 アジア歴史資料センター
- (5) 横須賀海兵團 『昭和14年1月入団 四等機関兵・四等工作兵修業記念(写真帖)』
- (6) 土屋三郎家文書 「土屋良助記『占守島』」（海軍野紙6枚）

郷土資料室事業概要（令和6年度）

『巡回展』まなびかん：9月19日～10月17日

1 郷土資料に関するレファレンス

- (1) 問い合わせ・相談件数 106件
- (2) 郷土資料利用許可件数 56件

2 関連団体の研修会等参加実績

- (1) 8月19～23日、独立行政法人国立公文書館
「令和6年度アーカイブズ研修Ⅰ」〔堀井〕
- (2) 9月26日、国立国会図書館 「令和6年度資料保存研修」〔堀井〕
- (3) 10月3日、神奈川県図書館協会地域資料委員会
「地域資料のデジタル化とアーカイブ構築」〔谷合〕
- (4) 11月29日、神奈川県歴史資料取扱機関連絡協議会
「令和6年度第1回研究会」“藤沢市文書館50年の現在地”ほか〔宮城〕
- (5) 1月22日、神奈川県歴史資料取扱機関連絡協議会
「令和6年度第2回研究会」“紙資料の基本的取扱い”〔谷合・堀井〕

3 依頼業務等

- (1) 7月11・18日、池上コミュニティセンター 講座
「三浦一族の歴史～三浦義村について～」講師〔谷合〕
- (2) 8月14日、16ミリ試写室“映像とお話”
「そこにしかない歴史」講師〔佐藤〕
- (3) 1月23日、追浜コミュニティセンター 講座
「中世三浦半島の浦々」講師〔谷合〕
- (4) 3月8日、三浦半島の文化を考える会 講座
「郷土資料室の所蔵資料と公開活用」〔谷合〕
- (5) 3月9日、川崎・横須賀・茅ヶ崎同時国史跡指定
10周年記念事業「史跡のかこ・いま・これから」
事例発表及びパネルディスカッション〔佐藤〕
- (6) まなびかんニュース2024年4・6・8・10月号～
2025年3月号、連載コラム「Café des 三浦一族」
第22・23・25～31回（最終回）〔谷合〕

4 所蔵資料等の公開・活用・アーカイブ等

- (1) 郷土資料の展示（日付は開催会期）
 - A) 企画展示『写真が語る平作川の風景』展
中央図書館1階ロビー：6月28日～8月28日



『写真が語る平作川の風景』展の様子



『写真が語る平作川の風景』巡回展の様子

- B) 常設展示『郷土資料展示コーナー』
9月27日～

※ 令和6年度から郷土資料の常設展示を開催中
企画展示及び他の機関主催の展示期間中は休止

- (2) 資料複製（デジタル化）件数 10件 68点
- (3) デジタルアーカイブ（図書館ホームページでの資料公開）

※ 点数は累計 / ☆=令和6年度の更新分を含む。
※ 上記(2)のうち可能なものは逐次公開している。

- A) 絵葉書：市内各所 143件、152点
- B) 絵葉書：横須賀海軍工廠建造の軍艦 15件、78点
- C) 貴重図書 3件、4点
- D) 写真：ガントリークレーン、EMクラブ他 22件、219点☆
- E) 写真：旧軍関係 2件、54点
- F) 古文書・古記録 3件、10点
- G) 地図・絵図等 26件、29点☆
- H) 郷土資料室『緒明山通信』 15点☆

計 561点☆

(4) 情報配信

- A) X（旧ツイッター）情報配信 16回
最多表示回数 8,621 「写真が語る平作川の風景」展の補足
- B) YouTube 横須賀市公式チャンネル 0本
累計3本 最多視聴回数 4,389 「駅と鉄道の風景 京急線編」
※ 回数は共に2025.3.31現在

(5) 郷土資料室情報誌（Web上での無料頒布）

- A) 緒明山通信 第14号 令和6年6月1日発行
- B) 緒明山通信 第15号 令和7年1月24日発行

5 寄贈資料

（寄贈順、敬称略）

- (1) 大村肇氏旧蔵写真（デジタルデータ） 110点
旭川市・Harry Baker
- (2) 冊子『浦賀案内記』 1点 市内・梅沢紀子
- (3) 元海軍技手今井秀一氏旧蔵資料 120点
市内・内山慶子
- (4) 参謀本部陸軍部測量局測量図等 10点
市内・西原康昌
- (5) 連合艦隊及び横須賀海軍工廠関連写真等 計4点
市内・盛 好子

- (6) 横須賀海軍航空隊写真及び冊子『提督の最後』
計 2 点 米国・キセキ遺留品返還プロジェクト
代表 ジャガード千津子



第一期特修科練習生卒業記念

昭和 14 年 12 月 20 日／横須賀海軍航空隊本部前にて
特修科は普通科・高等科より高度な専門技術を得得する
練習生制度（黒川氏手記の 4 ページ右段落 6 行目参照）

- (7) 各種記念品 12 点 三浦市・山内英司
(8) 旧海軍関係アルバム及び横須賀市立第一高等女学
校卒業記念写真帖 計 4 点 八王子市・坂本伸世



被災後の三笠（手前）と自沈処分される初代津軽
大正 13 年 5 月 27 日／津軽は日露戦争戦利品の巡洋艦 Pallada
陸地部分は海軍機関学校跡地で、復興と埋め立て工事中／昭和
3 年に海軍機関学校から分離した海軍工機学校が設置される

- (9) 庁内各局・関連機関等からの移管・寄贈資料
A) 大日本分縣地図併地名総覧 2 冊〔市立大楠中学校〕
B) 映像及び写真フィルム等一式〔生涯学習課〕

6 図書寄贈者・団体等一覧 (五十音順、敬称略)

安城市歴史博物館安祥文化のさと地域運営共同体、
安城市教育委員会、市川市市史編さん事業担当、
神奈川県立公文書館、神奈川県立日本常民文化研究所、
川越市立博物館、木更津市教育委員会文化課、
寒川文書館、16 ミリ試写室、逗子市教育委員会、
世田谷区立郷土資料館、タウンニュース社、
多賀城市埋蔵文化財調査センター、高千穂学園同窓会、
長野市公文書館、函館市青函連絡船記念館摩周丸、
葉山町、常陸大宮市教育委員会市史編さん事務局、
福岡市博物館市史編さん室、藤沢市文書館、
藤山幸一、府中市市史編さん担当、
町田市立自由民権資料館、三浦半島の文化を考える会、
大和市文化振興課、横浜市開港資料館、
横浜市史資料室、横浜 YWCA、わだつみのこえ記念館

7 事務執行体制の変更

	(令和 6 年度)	(令和 7 年度)
中央図書館長	柿原美奈	柿原美奈
郷土資料室担当主査	谷合伸介	谷合伸介
会計年度任用職員	佐藤明生	佐藤明生
会計年度任用職員	宮城 睦	
会計年度任用職員	堀井由貴子	堀井由貴子
会計年度任用職員	橋本和磨	橋本和磨

あとがき

『緒明山通信』第 16 号をお届けします。今号では、元海軍上等衛生兵曹黒川亮二氏の手記と令和 6 年度の事務概要を掲載しました。手記については、旧海軍施設に関するレファレンスをきっかけとして手記の存在を知り、所蔵者の賛同を得て掲載しました。

戦争体験などに関する手記やインタビューはこれまでも『緒明山通信』で紹介してきました。併せて下記各号をお読みいただくことで、戦後 80 年に際して改めて戦争と平和を考える機会になることを願います。

第 3 号 友に代わりて青空を見る

第 5 号 元陸軍特別幹部候補生第一期生が語る飛行訓練、そして終戦・引き揚げ

第 9 号 海軍予備学生所感集について

第 15 号 「きけわだつみのこえ」と海軍予備学生「渡邊崇」

本誌は印刷発行せず、ホームページからダウンロードしていただくことにより無償で頒布しています。印刷及び閲覧は図書館 HP 内の「デジタルアーカイブ」、あるいは横須賀市の HP 内の「市史のトップ」にアクセスしてください。

デジタルアーカイブ⇒

<https://www.yokosuka-lib.jp/contents/archive/>

市史のトップ⇒

<https://www.city.yokosuka.kanagawa.jp/8150/shish/shishi1-top.html>

図書館 HP「デジタルアーカイブ」のご案内

横須賀市立図書館ホームページでは「デジタルアーカイブ」のページを開設しています。近世以降の絵図、戦前期の絵葉書や写真等の郷土資料の他、『緒明山通信』（旧市史資料室通信）のバックナンバーもご覧いただけます。



↑ 三浦半島彩色絵図
(出版年未詳)
「ダイバ」と「陣」
の文字に赤彩

⇐ 横須賀市明細地図
(大正 10 年)
震災前の市街図／
鎮守府と海軍工廠
にあたる区域は田
浦の地図で覆う